詠む広場

毎日俳壇

西村　和子　選

沈下橋くぐりてとぼる蛍舟
茅ケ崎市　浜本　文子

〈評〉沈下橋は四万十川で見かける低い橋。「とぼる」は「ともる」と同じ。小舟から蛍を放つ趣向を詠んだ幻想的な作品。

完熟の音たて西瓜真っ二つ
尾道市　山口　恭子

〈評〉読み手の体験に訴えて音を描いた句。断面の色も鮮やか。下五の潔さが効果的。

迫りくる滝に歩みの止まりけり
神戸市　橋口　正子

貝殻を渡せぬままに夏が逝く
長崎市　田中　正和

落雷の寺の古木をまのあたり
川口市　高橋さだ子

風鈴を吊る新しき風が来る
羽生市　小菅　純一

絵団扇の裏も表も同じ風
伊勢市　奥田　豊

雨足のひと日激しく梅雨最中
福岡　水本　辰次

夏暁や夢の続きの鳥の声
名古屋市　井上美保子

水色のレースのケープ編む妊婦
三重　瀬川　令子

井上　康明　選

雲の峰敗者へ拍手なりやまず
高松市　島田　章平

〈評〉夏の高校野球、敗者への拍手は闘いをたたえ、その未来を祈る拍手だろう。積乱雲が球場のドラマを見下ろしている。

凪ぎわたる夕べの海の月見草
富士市　後藤　秋邑

〈評〉月見草はオオマツヨイグサととった。夏の夕暮れの波音に、黄色い花の群落が揺れている。

日焼してぶつきらぼうな子となりぬ
奈良市　上田　秋霜

夏の雲病院食の味薄く
姫路市　板谷　繁

生まるるも死ぬるも手ぶら流れ星
川越市　峰尾　雅彦

祭来る交通規制立看板
さいたま市　根岸　青子

昼寝覚友は彼の世に帰りたる
飯塚市　倉田　幸男

熊蟬のここが故郷みかんの木
小田原市　林　梢

雨の粒残し紫陽花夜を迎ふ
久留米市　持地　恒美

つちくれの欠片もあらず蟬の穴
東京　望月　清彦

片山由美子　選

草むしり二階より指示受けにけり
春日市　林田　久子

〈評〉2階からは庭が見渡せるのだろうが、涼しいところから言いたい放題のような気も。暑さの中での草むしりは楽ではない。

父のこと聞く母も亡き敗戦日
和泉市　中川　永子

〈評〉父は戦死したのかもしれず直接の記憶がない。話を聞かせてくれた母も既にいない敗戦日。ただいまと言へば金魚のひるがへる
長浜市　中島　正則

純白の珈琲カップ秋立ちぬ
岡山市　仲野　恒彦

古墳よりペルシャのグラス雲の峰
奈良市　梅本　幸子

古簾老いては隠れ住むに似て
大阪市　福永　都女

ひと雨のさつと上がりて夜の秋
土岐市　水野　雅子

遠雷や小走りになる交差点
真岡市　小川　充

誰もゐぬ午後の校庭蟬時雨
葛城市　久保　政子

はまなすや海を隔てて利尻富士
札幌市　清水　志

小川　軽舟　選

対岸に届かぬ小石晩夏光
徳島市　越智　大地

〈評〉河原の小石を拾ってたわむれに投げた。水面にぽちゃんと落ちた小石に、夏の終わりのやるせなさが出ている。

庭を誉め器を誉めて夏料理
伊勢市　藤井　信弘

〈評〉夏料理にふさわしく涼しげにしつらえられた席。もちろん料理もほめたに違いない。

草かげろふ母臨終の壁ぎはに
大阪　芹澤　由美

腕捲り胸をはだけて泥鰌鍋
国分寺市　野々村澄夫

朝顔や市営団地のドアの音
山形　佐藤美和緒

新緑や信楽駅の汽車土瓶
伊賀市　福沢　義男

流れゆく水の暗さや梅雨夕焼
岡山市　三好　泥子

新涼や白衣の女医のスニーカー
龍ケ崎市　小宮　光司

変はらざるラジオ番組朝涼し
東村山市　出田　邦山

熱の子の唇紅しさくらんぼ
横浜市　荒木　久子

俳句てふてふ

注目の一句

塩見恵介

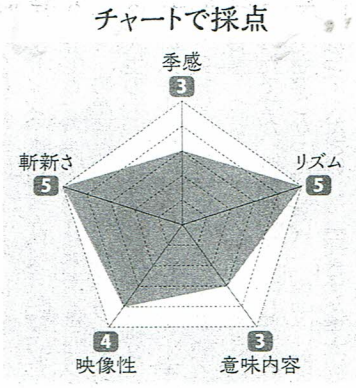
自転車のサドルが熱い墓参り
大江戸神楽

気軽に自転車で行けるほど近い距離の親族の墓。作者と故人が今なお心的な交流の感覚を日常に有していることがうかがえる。残暑というには厳しい、酷暑の8月、墓参を終えて乗る自転車のサドルが灼けている。そこに墓参の時間の長さを感じとるべきか、此岸と彼岸の距離を思い、改めて故人を悼む心か。多様に読みが広がる。

先日、毎日文化センター大阪で私の俳句グループに所属する20代の俳人・齋藤よひらさんの講座「俳句、第一歩」があった。季題の「金魚すくい」はアナザーストーリー、アフターストーリーを句に反映させる手法が効果的という見解と実作例が興味深かったが、「墓参り」もその類いかもしれない。

（しおみ・けいすけ＝俳人）

チャートで採点



アプリ
俳句てふてふ

全国景勝地俳句コンテスト　毎日新聞社は富士五湖や耶馬渓など133景勝地にちなんだ俳句を募集中。1930（昭和5）年に高浜虚子選で実施した「日本新名勝俳句」の後継企画。選者は俳人の稲畑廣太郎さんと星野高士さん。詳しくはアプリ内の応募要項をご覧ください。

アプリのダウンロードはこちら